

県民の本棚～であい、ふれあい「ちばの100冊」～

ゆかりの物語

『青べか物語』 山本周五郎 著 1987

山本周五郎の代表作の一つで、舞台になっている漁村の浦粕とは今の浦安です。今では東京ディズニーリゾートで賑わっていますが、今でも昔からの漁村の名残を感じることでできる場所です。べか舟はなくなってしまいましたが、海辺の人々の暮らしや人間性が描かれ、どこか懐かしい作品です。

『アメンボ号の冒険』 椎名誠 著 講談社 1999

千葉に住んでいた作者の、少年時代の冒険物語です。筏を作って川下りをしたり、埋立地でこっそりキャンプをしたり、子どもなら誰でもわくわくするような冒険の話は、子どもだけでなく、子ども時代を懐かしく思う大人にもお勧めです。

『原子炉の蟹』 長井彬 著 講談社 1981

第27回（昭和56年）江戸川乱歩賞を受賞したミステリー小説です。九十九里浜にある原子力発電所で起きた密室殺人を、新聞記者が解き明かしていくという設定です。記者が勤務している千葉市と原子力発電所がある東総地域が舞台の中心です。特に、千葉駅周辺は、百貨店、喫茶店、居酒屋、千葉城などが随所に出てきます。丁寧な取材のもと、原子力発電所の建設にまつわる疑惑をテーマにした作品です。

『海を感じる時』 中沢けい 著 講談社 1980

父を早くに亡くした高校生の恵美子は、母との二人暮らし。「女らしさ」に反発を感じ自立を目指しながらも、同じ部活で知り合った上級生に尽くしたいと思っている自分の矛盾に気づきます。また、母と娘の関係も互いに愛情を持ちながら、すれ違っていきます。館山の町と海を舞台に懸命に生きる少女を、18歳の著者が描いた青春小説です。

『さざなみ情話』 乙川優三郎 著 朝日新聞社 2006

高瀬舟の船頭の修次と、松戸の飯盛宿のちせの恋物語。江戸時代の下層階級の過酷な労働状況だけではなく、当時の水運の繁栄の様子など、興味深く読める作品です。

『十返舎一九の房総道中記』 十返舎一九 著 鶴岡節雄 校注

千秋社 1984 （新版絵草紙シリーズ）

江戸時代の十返舎一九の絵草紙（青本）が底本であり、丁寧な校注が付けられ、現代人にも読みやすい内容となっています。一九が江戸小網町の行徳河岸から行徳船で行徳に渡り、内房を館山へとたどり、さらに茂原、市原を経て、千葉から船で江戸へ帰り着くまでの房総半周の道中記です。土地土地の名所、名物などゆかりを眺めるだけでも楽しめる旅行記です。

『少年少女古典文学館 22 里見八犬伝』 栗本薫 著 講談社 1993

南房総を舞台に八犬士が戦う「南総里見八犬伝」を子どもでも読めるように書かれています。テレビで放送された八犬伝を見て興味を持った人にもお勧めです。

『少年八犬伝 上・下』 小野裕康 著 多田ヒロシ 絵

理論社 1988 (地平線ブックス)

千葉県生まれの作者が南総里見八犬伝を基にした作品です。現代に蘇る八つの玉と八犬士の戦いがリズム感のある文章で描かれています。中学生に特にお勧めです。

『新編日本古典文学全集 26 更級日記』 菅原孝標女 著 犬養廉 校注・訳

小学館 1994

平安の時代、菅原孝標一家が任地上総（現在の市原市）から京都へ帰る時に始まる娘の日記です。文学少女だった彼女の日記には源氏物語や、古今和歌集など当時人気を博した文学への憧れが随所にみられ、道中いかに景色を楽しみつつ京へ上ったことかと思ひ巡らすことができます。康平元年（1058）10月の夫の野辺送りですべて終わっています。

『智恵子抄』 改版 高村光太郎 著 新潮社 2003

光太郎の妻智恵子は、精神を病み治らぬまま亡くなってしまいます。智恵子への光太郎の愛が溢れる美しい作品です。九十九里で静養した期間も長く、詩集とともに「九十九里浜の初夏」が納められています。真亀海岸に「千鳥と遊ぶ智恵子」の碑がありますが、海岸の千鳥が今でも智恵子を呼んでいるようです。

『千葉の童話』 日本児童文学者協会『県別ふるさと童話館』編集委員会 編集

リブリオ出版 1997 (愛蔵版県別ふるさと童話館)

千葉県を舞台にした創作童話や少年少女詩を集めた童話集です。

『天国までの百マイル』 浅田次郎 著 朝日新聞社 1998

バブルの崩壊とともに会社が倒産、妻子とも別れた男は、養育費に追われ自分の生活が成り立たないまでになってしまいます。そのような時、心臓病を患っていた母の病状が進み、最後の望みは神の手によるバイパス手術だけでした。奇跡を信じて千葉県の海に面したサン・マルコ病院を目指します。家族のあり方、人との深い結びつきに感動を呼ぶ物語です。

『南総里見八犬伝 全12巻』 曲亭馬琴 作 浜田啓介 校訂

新潮社 2003-2004 (新潮日本古典集成)

曲亭馬琴が約200年前の江戸時代後期に書いた千葉県を舞台とした作品であり、八つの玉が結びつけた八犬士が活躍する長編小説です。八犬伝は、古今を通じて多くの人を魅了してきた作品です。

『野菊の墓』 伊藤左千夫 著 新潮社 1968

作者の伊藤左千夫は、千葉県山武郡の農家で生まれた明治後期の歌人、小説家です。野菊の咲き乱れる千葉県の田園風景を背景に描かれており、その素朴な風景がお互いに想い合う2人をとりまき、余計に悲しい出来事を引き立てています。千葉県を舞台にくりひろげられたとても切ない純愛、この感動を多くの人に読んでほしい作品です。

『ベロ出しチョンマ』 斎藤隆介 作 滝平二郎 絵 理論社

2000 (新・名作の愛蔵版)

千葉の花和村の「ベロ出しチョンマ」という人形に秘められた悲しい物語です。貧しい農村の窮状を救うために、直訴した父とその家族に起こった悲劇。幼ない兄妹のやりとりが切なく胸を打ちます。「ベロ出しチョンマ」という人形は、義民佐倉宗吾にまつわる創作ですが、民話調の語りと滝平二郎の絵が、当時の人々の切なる思いを今に伝えています。

『魔の海に炎たつ』 岡崎ひでたか 作 小林豊 画 くもん出版 2004

南房総を舞台に、船大工の次男満吉が、船大工になるべく苦しい修行をする児童向け物語です。強い意志のもと最後には夢をかなえることができます。この本を通じて、将来の夢に向かって邁進することの大切さを感じ取れると思います。

『麦熟るる日に』 中野孝次 著 河出書房新社 1979

第7回(1979年)「平林たい子賞」受賞作でもある本書は、市川市生まれの著者の自伝的小説です。大工だった父にあこがれながら、また、職人氣質の父が厚い壁となり進路をはばみます。戦前戦中の市川の町並みが、少年の背景にぴったりと付いています。

文学案内

『かくれみの街道をゆく -正岡子規の房総旅行-』 関宏夫 著 崙書房出版 2002

明治24年(1891)春、帝大の学生だった正岡子規は、房総を一人で歩いて旅し、「かくれ蓑」「隠蓑日記」「かくれみの句集」という作品を残しています。著者は、子規の歩いた道を「かくれみの街道」と名づけ、子規が旅行中につけた筆記帳や、「隠蓑日記」の日程に従って、その道を歩いてたどり、「写生」に目覚める直前の子規を検証しました。

『鑑賞 房総の古典文学』 江口孝夫 著 崙書房 1985 (ふるさと文庫)

この本では、『万葉集』に登場する「真間の手児奈」や「防人の歌」から、江戸時代、上田秋成『雨月物語』の「浅茅が宿」まで、代表的な日本古典文学の中から房総に関する記述を取り上げています。登場人物の性格に焦点をあてているので、大変興味深い作品です。

『島崎藤村 -房州・『巡礼』-』 千葉宣朗 著 千秋社 1980

房州と島崎藤村のつながりに光を当てた作品です。著者は、昭和53年(1978)秋から翌年冬にかけて、関係者を尋ねて房州各地を巡り歩き、調査しました。その過程で、著者は、藤村の家で住み込みで働いていた女性が、藤村からもらって所蔵していた「新・巡礼ノート」と出会い、藤村の作品「巡礼」解明に取り組んでいる点が興味深く紹介されています。

『書でめぐる房総文学の旅』 幕田魁心 書 笹生浩樹 写真・文 木耳社 2010

「月の沙漠」や「証城寺の狸囃子」は千葉県で生まれた童謡です。また、房総は、夏目漱石、芥川龍之介、正岡子規ら多くの文人が訪れ、名句を残しました。著者はそれらを書きで表現し、紹介しています。房総の「美」を再発見することができます。

『漱石の夏やすみ -房総紀行『木屑録』-』 高島俊男 著 筑摩書房 2007

夏目漱石は、帝大入学前、予備門の学生だった数え年23歳の夏、房総半島を旅行し、その旅について、漢詩も入れた漢文で『木屑録(ぼくせつろく)』という紀行文を書いています。この作品は、同級生、正岡子規が『七草集』を作って仲間に見せていたのを見て、ライバル意識を燃やした漱石が子規に見せるために作ったものです。

**『ふさの国文学めぐり』 再改訂版 千葉県高等学校教育研究会国語部会 編
富士出版印刷 2010**

昭和42年(1967)発行の『房総の文学めぐり』の再改訂版です。千葉県出身や房総を訪れて作品を残した文学者の足跡を千葉県高等学校教育研究会国語部会のメンバーが自ら訪ね歩き、調査、執筆したものです。再改訂版の発行に際し、新メンバーが再び現地に赴き、最新の情報を収集しました。幅広い読者層向けに書かれています。

『房総を描いた作家たち』 中谷順子 著 暁印書館 1998

千葉日報に、平成3年（1991）から「房総の作家」として連載されているものです。平成23年（2011）現在、第4巻（2008年刊）まで出版されています。房総の作家とは、千葉県に生まれ育った作家という意味ではなく、千葉県を小説・随筆などに描いた作家です。その作品の千葉に関する部分をピックアップして追っています。

ドキュメンタリー

『朝の読書が奇跡を生んだ ー毎朝10分、本を読んだ女子高生たちー』

船橋学園読書教育研究会 編著 高文研 1993

「朝の読書」は、現在、全国の学校で広く行われています。その実践に初めて取り組んだのが、この本で紹介されている船橋市の船橋学園女子高校（現、東葉高等学校）で、昭和63年（1988）のことでした。平成5年（1993）に出版されると大変反響を呼びました。続編（1996）、『「朝の読書」が学校を変える』（2001）も出版されています。

『あの夏、西の風が吹いた ー銚子西高野球部の青春物語ー』 小林信也 著

ベースボール・マガジン社 2008

市立銚子西高等学校は、平成20年（2008）3月、市立銚子高等学校と統合され、30年余の歴史に幕を下ろしました。同校には、開校翌年に創部され、石拾いをしてグラウンドを整備することから始め、5年目の夏、ついに甲子園出場を果たした野球部がありました。野球にかけた球児たちの青春と卒業後の人生を追ったノンフィクションです。

**『命をつなげ！ドクターヘリ ー日本医科大学千葉北総病院よりー』 岩貞るみこ 作
講談社 2008 （講談社青い鳥文庫）**

千葉県では、平成13年（2001）10月から日本医科大学千葉北総病院を基地病院としてドクターヘリ事業が開始されました。同病院におけるドクターヘリを使った最先端の救急医療の様子を、新米医師の目を通して描いた児童向けノンフィクションです。救命救急に携わる人々の熱い思いと、ドクターヘリの意義がよく理解できます。

『学校が兵舎になったとき ー千葉からみた戦争一九三一～四五ー』 新装版

千葉県歴史教育者協議会 編集 青木書店 2004

平成15年（1995）は、「戦後50年」と呼ばれる年でした。県内各地では、ニイタカヤマノボレを発信した船橋の無線塔、風船爆弾製造のための学徒動員、それぞれの地域に残る戦争の具体的史実の調査・研究が進められました。本書では、それらを一つの記録にまとめることで、「千葉」という地域から戦争の全体像に迫ろうと試みました。

『千葉今昔物語 ー新房総歳事記ー』 海老名雄二 著 平野元三郎 著

千秋社 1974

昭和46年（1971）にNHK千葉FMで放送された「房総今昔」をもとに、千葉県各地に古くから伝わる行事や事件、人物など郷土の話題が、1月から12月まで歳時記の形でまとめられています。

『ちび象ランディと星になった少年』 坂本小百合 著 文春ネスコ 2004

主人公は、ゾウが好きで、ゾウの行く末を思い、日本初のゾウ使いとなった少年です。しかし、彼は早逝してしまいます。少年の母であり、市原ぞうの国を設立した筆者が亡き息子とゾウたちについての軌跡を振り返る物語です。

『朝鮮の千葉村物語 ー房総から渡った明治の漁民たちー』 石垣幸子 著

崙書房出版 2010 (ふるさと文庫)

著者は、流山市立博物館友の会で活動、研究誌『東葛流山研究』に多くのエッセイ、論文を発表しています。日露戦争の最中に、不漁に喘いでいた房総から漁民が移住し、朝鮮に千葉村が形成されました。活気のある村でしたが、鈴木松五郎監督が殺害されてからは衰退の一途をたどりました。その千葉村の真相解明に挑んだ作品です。

『東京湾をつないだ男たち ー巨大事業を支えた技術者の記録ー』

日経コンストラクション 編 日経BP社 1997

事業着手から10年、調査開始から数えると30年の歳月を費やし、平成13年(1997)12月、東京湾アクアラインがついに完成しました。水漏れのないトンネルを築くため、湧水という危機と困難に直面しながらも、その都度、決断を下してプロジェクトを完成に導いた技術者たちの仕事ぶりを紹介したドキュメントです。

『「ナリタ」の物語 ー1978年開港からー』 大和田武士 著 鹿野幹男 著

崙書房出版 2010

成田開港30周年にあたる平成20年(2008)、朝日新聞千葉版では、「国が反対派かにこだわらない」「無名の人に光を当てる」という基本方針の下、60人を超える関係者に改めて取材し、成田闘争の歴史をひもとく「30年の物語」という連載を行いました。この本は、その中で、特に反響の大きかった記事をもとに加筆したものです。

『「花の谷」の人びと ー海辺の町のホスピスのある診療所からー』 土本亜理子 著

シービーアール 2004

「花の谷」とは、南房総は千倉町にある花の谷クリニックのことです。そこは、終末期医療の「海辺のホスピタル」として知られています。ここを死に場所と選んだ患者や家族、やりがいのある職場として移り住んだスタッフの声などを集めました。誰もが避けることのできない死を意識した時、命を預かる医療系を目指す若者にも、読んでほしい一冊です。

『房総白球伝 ー野球王国ちばの100年ー』 和田正樹 著 崙書房出版 1992

平成3年(1991)は、千葉県で野球が取り入れられてから100年目にあたり、読売新聞千葉版では、「房総白球伝」の連載が企画されました。佐倉出身の長島茂雄や、甲子園の常連校となり、全国制覇も成し遂げた銚子商や習志野にまつわるものなど、興味深い50のエピソードを発掘し、100年間を振り返っています。

『房総美術の往還 ー近代日本美術の黎明を追ってー』 中地昭男 著

求竜堂 1991

著者は、千葉県で教員を経て、県立美術館に勤務しました。著者の永年にわたる房総美術研究を集大成したものが本書です。著者は、房総は、炎えるような男性的な一面と、疲れた心を癒す女性的な優しさを併せ持っていて、房総にかかわった作家も作品も、この風土性に大きく影響を受けて生まれていると言います。

民話・昔話・伝説

<p>『千葉県民話 ー証誠寺のタヌキばやしほかー』 日本児童文学者協会 編 偕成社 1980 (県別ふるさとの民話)</p> <p>「ツバキの海」(とおいとおいむかしの話)、「びんぼう神」(ほのぼのと心あたままる話)、「太政さまの杉の皮」(すこしむかしの話) など、伝説、むかし話、現代民話あわせて33話を収録しています。巻末に各話についての解説があります。小学校高学年から読めます。</p>
<p>『千葉県ふるさとのむかし話』 荒川法勝 著 暁印書館 1995</p> <p>「真間の手児奈のはなし」、「羽衣の松」など、千葉県各地に伝わるむかし話を39話収録しています。小学校中学年から読めます。</p>
<p>『千葉県妖怪奇異史談』 荒川法勝 編 暁印書館 1997 (写真で綴る文化シリーズ)</p> <p>怨霊・鬼神を始め、県内各地の異相伝説、秘史、魔界の眷属たちの不思議な話など63の伝承を集めています。それぞれの伝承の舞台となった土地に残る遺跡の写真も、豊富に掲載されています。</p>
<p>『千葉の伝説』 千葉県文学教育の会 編 日本標準 1981</p> <p>千葉で語り伝えられてきた伝説を36話収録。お話のほかコラム(「清澄山のとんぐ」ほか)や巻末の「ひとくち伝説」でも71の伝説が紹介されています。小学校高学年から読めます。</p>
<p>『手児奈伝説 ー万葉に歌われた真間の娘子ー』 千野原靖方 著 崙書房 1977</p> <p>市川市に伝わる手児奈の伝説を、万葉集に収められた歌、伝説成立の事情と時代背景、手児奈霊堂建立の経緯、伝説にまつわるいわれなどの観点から考察しています。</p>
<p>『謎のなんじゃもんじゃ ー千葉の民話ー』 岡崎柁男 著 げんごろう 1996</p> <p>「火車猫おトラ」、「トゲ抜き地藏」、「カップ池の主」など下総地方に伝わる34話を収録しています。それぞれに「話の背景」の解説があり、上総、安房地方に関連する話についても触れられています。</p>
<p>『房総の伝承奇談』 杉谷徳蔵 著 暁印書館 1997</p> <p>千葉に伝わる民話や伝説などから「龍」、「天狗」、「椀貸伝説」といった架空の動物や民俗学的伝説の話題30を選んで、それらにまつわる不思議な話、奇談を紹介しています。</p>
<p>『房総の秘められた話、奇々怪々な話』 大衆文学研究会千葉支部 編著 崙書房 1983</p> <p>史実、伝説、民話、物語などのなかから、墓・塚・祠の話、動物や植物の話、義民の話、埋蔵黄金・財宝の話など不思議な話、奇怪な話60編を収録しています。</p>
<p>『読みがたり千葉のむかし話』 「千葉のむかし話」編集委員会 編 日本標準 2005</p> <p>「さるかに」(ゆかいな動物ばなし)、「片歯の梅」(ふしぎな話)など47話が千葉の方言を使った語り口で書かれています。続編(「千葉のむかし話 続」1980年刊)も出版されている「千葉のむかし話」(1973年刊)の改訂版です。小学校中学年から読めます。</p>

ひと

<p>『石川倉次物語 ー日本点字の創始者ー』 永嶋まつ子 著 永嶋まつ子 2009</p> <p>フランスのルイ・ブライユの点字をもとにして日本点字を発案した石川倉次は、長南町で育ち、千葉県で教壇に立った後、生涯、視聴覚障害児教育に携わった人物です。彼の生涯とその功績を、ふりがな付きで、小学生から読むことができるように書かれています。</p>
<p>『埋火 ー謙映院幾千子と堀田正睦ー』 秋本喜久子 著 新人物往来社 2007</p> <p>幕末の佐倉藩主・堀田正睦とその義母である幾久子を描いた時代小説です。貧窮する佐倉藩の財政を立て直し、幕府の要となり開国に携わっていく過程が描かれています。</p>
<p>『上総下総千葉一族』 丸井敬司 著 新人物往来社 2000</p> <p>平安時代末期から戦国時代まで、下総国や上総国の一部を支配した千葉氏について、一族や家臣団の歴史、千葉県外の千葉氏一族、千葉氏が信仰した妙見信仰などについて書かれています。巻末には系図が掲載されています。</p>
<p>『佐倉惣五郎』新装版 児玉幸多 著 吉川弘文館 1985 (人物叢書)</p> <p>小説や戯曲などで有名な義民・佐倉惣五郎。架空の伝説が多い中、人物や事件の背景について、できるだけ史実に基づいて明らかにした伝記です。</p>
<p>『千葉県を築いた人びと』 千葉県教育研究会社会科教育部会 編 旺文社 1985 (郷土を築いた人びとシリーズ)</p> <p>千葉県に生まれ育った人や生涯を千葉で送った人など、千葉県の発展につくした人物50人について、人物の年表や豊富な図、写真とともに、小・中学生向けにわかりやすく紹介しています。</p>
<p>『千葉県歴史の人物』 荒川法勝 編 暁印書館 1988 (写真で綴る文化シリーズ)</p> <p>太古から終戦時までの千葉県の歴史上に輝く代表的な人物について、肖像やゆかりの地の写真を多く掲載しながら紹介した人物集です。</p>
<p>『千葉常胤』 福田豊彦 著 吉川弘文館 1987 (人物叢書)</p> <p>千葉常胤は、頼朝に従って鎌倉幕府を作りあげた御家人の一人で、現在の千葉市立郷土館のあたりが居住跡だと言われています。残された数少ない資料をもとに彼の一生が描かれていて、常胤の人物像がよくわかります。</p>
<p>『千葉の先人たち』 千葉県教育研究会社会科教育部会 編著 光文書院 1981</p> <p>小・中学生向けに新井白石、堀田正睦など、千葉県出身の人物や千葉県を活躍の舞台とした人物19人を中心にとりあげ紹介した伝記集です。</p>
<p>『天と地を測った男 ー伊能忠敬ー』 岡崎ひでたか 作 くもん出版 2003</p> <p>江戸時代に、初めて実測による正確な日本地図を作製するという大事業を達成した伊能忠敬。九十九里に生まれ、佐原の豪商として辣腕を振るい、50代で地図作りを始めたその生涯を描く、児童読み物です。</p>
<p>『ドン・ロドリゴの日本見聞録 ースペイン人の見た400年前の日本の姿ー』 ドン・ロドリゴ 著 安藤操 意訳・解説 たにぐち書店 2009</p> <p>約400年前、スペイン船が遭難し、乗員が御宿に漂着しました。その時の様子を記した、スペイン人ドン・ロドリゴによる「見聞録」を読みやすく編集した本です。大多喜城、江戸や京都を訪れた時の様子や、徳川家康とのやりとりなどが書かれています。</p>

『波の伊八 ー北斎に影響を与えた房州の彫工ー』 七海敦子 著

千葉日報社出版局 2004

謎多き江戸時代の彫刻家「波の伊八」。さまざまな調査を重ねた著者が波の伊八の一生を題材に書き上げた歴史小説です。

『房総ふる里発見伝 ー千葉を彩る107人ー』 読売新聞社千葉支局 編著

崙書房出版 1999

「地元で活躍する人々を紹介し、町を見直そう」というコンセプトの元取材した、読売新聞の連載記事をまとめた本です。単に人名録ではなく、読み物として楽しめるよう編集されています。

『四千万歩の男 全5巻』 井上ひさし 著 講談社 1992ー1993

日本全土を歩き回り、実測による日本地図を完成させた伊能忠敬。二間で一步だったとすると、彼の歩いた距離は約四千万歩。地図の好きな著者が伊能忠敬の一生を描く長編歴史小説です。

自然

『生きている印旛沼 ー民俗と自然ー』 白鳥孝治 著 崙書房出版 2006

印旛沼およびその流域の概要、過去の人々の生き方、自然的特徴、現在の状況などを、千葉県の水質研究所長、公害研究所長を歴任した著者が詳述しています。その自然的特性や、地域の歴史・民俗と自然の生態系などを複眼的に捉え、環境保全の視点から今後の印旛沼の環境についても言及しています。

『大山千枚田百選』 水田稔 写真 人類文化社 2002

「日本の棚田百選」にも選ばれた鴨川市の大山千枚田は、東京から最も近い棚田ということもあって、近年注目されています。本書は、鴨川市出身の著者が7年間にわたって棚田の四季や里山の自然を撮りつづけた美しい写真集です。

巻末には「日本の棚田百選」のリストがあります。

『消えた砂浜 ー九十九里浜五十年の変遷ー』 小関与四郎 撮影

シップ・アンド・オーシャン財団海洋政策研究所 編 日経BP企画 2005

九十九里浜を出身地とする写真家が、半世紀に渡り追い続けた、九十九里浜の変わりゆく姿と、人々の暮らしを写真に収めた一冊です。過去の海辺の光景を懐かしむ写真集であると同時に、日本の沿岸の現在と将来の環境についても考えさせられる資料です。

『子どもとふれあう千葉しぜんたんさくガイド』

松戸市理科同好会ネイチャーグループ 著 丸善メイツ 1998

親子で楽しみながら自然観察ができる、県内の公園、森、川や海などのスポットが紹介されています。現地では出会える生き物や植物について、写真や挿絵で解説されており、スポットへのアクセスに必要なデータや地図についても掲載されています。

『たんぼのおばけタニシ』 大木淳一 しゃしんとぶん そうえん社 2009

(そうえん社写真のえほん)

本書は、九十九里地域での米作りと、それに被害をもたらす外来生物（おばけタニシ：スクミリンゴガイ）の生態や、人との関わりを、読みやすい平易な文章で紹介した科学絵本です。子どもから大人まで全ての世代に、ふるさとの自然の現状とあり方を考えるきっかけを提供してくれます。

『ちば滝めぐり』 う沢喜久雄 著 鶴沢幸子 著 斎書房出版 2009

千葉県にある200を越す滝を、[夷隅ブロック]、[君津ブロック]など6ブロックに分割し、紀行文と写真により、紹介しています。有名な粟又の滝(大多喜町)などのほかの、隠れた滝についても記述があり、また交通の便や地図のデータも掲載されていることから、滝めぐりのガイドとしておすすめします。

『千葉の自然をたずねて』 築地書館 1992 (日曜の地学)

各県の地質、化石、鉱物、生物、地理、歴史、文化財などを、コース別に紹介する「日曜の地学」シリーズの千葉県版で、県内を11のコースに分けて紹介しています。地質学の観点からわかりやすく解説しているので、千葉県の地質や地形と、地球全体の運動や気候変動とに深い関わりがあることが理解できます。

**『千葉県の山』 改訂版 中西俊明 著 植草勝久 著 山と溪谷社 2010
(新・分県登山ガイド)**

千葉県の代表的な46の登山コースが紹介されています。難易度や歩行時間・歩行距離等が一目でわかるようになっており、またビューポイントや入山口、分岐点などの重要ポイントも写真で紹介されています。市町村役場、交通機関等の問い合わせ先のデータもあり、便利なガイドブックです。

**『千葉花の名所12カ月 ー花39種・名所134カ所ー』 山と溪谷社 2000
(ジェイ・ガイド)**

千葉にある花の名所を、4月から12か月を順に紹介しています。春の桜に始まり、夏の花ハスや秋のコスモスそして早春の南房総の花畑までの季節の花々39種が、写真と文章で綴られています。アクセスに必要な交通機関などのデータと地図も掲載されており、千葉の花々の名所を訪れるには便利なガイドです。

『利根川物語』 高橋裕 著 筑摩書房 1983 (ちくま少年図書館)

千葉県と関わりの深い利根川は、古くから「暴れ川」として知られ、その治水は為政者にとって最も重要な課題でした。現在に至るまで様々な改良の試みがなされて来ましたが、本書はこの利根川を上流から下流へと改良の軌跡をたどりながら、読者に川とのつきあい方について考えてみることを勧めています。中学生から読めます。

**『房総半島の地学散歩ー海から山へ 第1巻 第2巻』 宮内崇裕 編
理学研究科地球科学コース 編 千葉大学房総研究会 編集 千葉日报社
2008-2009 (千葉学ブックレット)**

千葉大学の教授、准教授ら多彩な執筆陣により「千葉を知り、千葉を考える」ことを目的に発刊された「千葉学ブックレット」の一冊です。房総半島の地学的な独自性や面白さを、その生い立ち・現在の状況そして将来などについて最新の話・資料に基づき、地形・地層・地場などを中心に紹介しています。

**『幻のカエル ーがけに卵をうむタゴガエルー』 大木淳一 写真・文
新日本出版社 2006 (ドキュメント地球のなかまたち)**

『(声はすれども姿が見えない) 幻のカエル』といわれるタゴガエルは、田んぼで合唱しているカエルたちとは違い、水が湧き出す崖の穴で、姿を見せずに鳴いています。本書は、養老溪谷上流のタゴガエルの暮らしぶりを紹介した、写真絵本です。また巻末には県内のカエルたちについても掲載されています。

くらし

『海女たちの四季 ー房総海女の自叙伝ー』 新版 田仲のよ 著 加藤雅毅 編
新宿書房 2001

白間津で生まれ育った筆者が、海女の暮らしや自らの半生を振り返った自叙伝です。

『江戸東京を支えた舟運の路 ー内川廻しの記憶を探るー』 難波匡甫 著
法政大学出版局 2010 (水とくまち>の物語)

川にまつわる歴史、文化、地形の話です。千葉県は隣接都県との境を川がなしており、川との関係がたいへん深い県です。川を中心に都市が造られ、産業が発達し舟運が興りました。写真が豊富でたいへん読みやすい本です。

『がんばれ！銚子電鉄 ーローカル鉄道とまちづくりー』 向後功作 著
日経BP社 2008

車両の検査費用を捻出できず、財政危機を迎えた銚子電鉄。ホームページに掲載した「ぬれせんべいを買ってください」の一言で、支援の輪が広がっていった当時の状況から、銚子電鉄の歴史、地方鉄道のあり方、まちづくりについてまで語られた、鉄道ファンならずとも興味深い一冊です。

『鯨のタレ ー伝統食文化と房総の漁師たちー』 山口栄彦 著
多摩川新聞社 1999

鯨のタレは江戸時代から捕鯨が行われていた南房総の特産で、鯨の肉をタレに漬け込んで、天日に干して作る伝統食です。地元の漁師や漁業関係者への取材をもとに、この鯨のタレを中心として、房総の捕鯨や漁師の生活についてまとめられた一冊です。

『小湊鉄道の今昔 ーレールは人生を乗せてー』 遠山あき 著 崙書房出版 2004

五井駅から上総中野駅まで、養老川に沿うように房総半島を走る小湊鉄道。その歴史や鉄道を支えた人々、各駅の歴史や周辺地域についてなどを、長年の乗客である著者が愛情を込めて記しています。

『旬・菜・記 ー千葉はうまいー』 高山修一 著 崙書房出版 2009
(ふるさと文庫)

ネギ、落花生、梨、イワシ、タイそしてアワビなど千葉の豊富な食材について紹介しています。千葉のおいしさがたくさんつまった一冊です。

『千葉県下の各高等学校校歌集』 補訂版 奥村正子 編集 田村洋子 編集
奥村正子 2000

平成12年(2000)3月発行、千葉県内の高等学校の校歌集です。歌詞編と楽譜編が一冊にまとめられています。歌詞の作者を見ると千葉県の教育に尽くされた方、有名な詩人、歌人、小説家がほとんどで、作曲も有名な方が多く、改めて各学校の歴史が感じられます。

『千葉の建築探訪』 中村哲夫 著 崙書房出版 2004

江戸末期から明治・大正にかけての房総の文化財というべき、教会、神社仏閣、学校、銀行、灯台、商家、豪農、文豪の生家など古い建築に焦点をあて、歴史と建築の両面から紹介しています。写真とわかりやすい文章でまとめられ、楽しみながら房総の歴史と古建築を知ることができます。

<p>『ちばの鉄道一世紀』 白土貞夫 著 斎書房出版 1996</p> <p>千葉に初めて鉄道が開通した明治時代の様子や、現在県民が身近に利用している各路線の歴史、消えた鉄道や実現しなかった幻の鉄道など、県内の鉄道事情の百年がわかります。</p>
<p>『手仕事の匠たち ー千葉職人紀行ー』 清野文男 写真・文 斎書房出版 1991</p> <p>大量生産の時代にも「手づくり」にこだわる職人の世界。その生活や作品について写真と文章で綴った、房総各地の職人たちの記録です。長い年月、磨き抜かれた技と手作りの美しさが伝わる一冊です。</p>
<p>『東京湾漁師町 ー江戸前の食を求めてー』 西潟正人 著 生活情報センター 2006</p> <p>東京湾内の漁師町が写真や地図入りで丁寧に説明され、歴史的背景なども知ることができます。また、海の幸を味わうことができるお店も紹介されており、目にも舌にもうれしい本です。</p>
<p>『日本の食生活全集 12 ー聞き書 千葉の食事ー』 「日本の食生活全集 千葉」編集委員会 編集 農山漁村文化協会 1989</p> <p>調査・取材に基づき、千葉県内各地の昭和初期の食生活についてまとめています。レシピだけではなく、食生活に関わる様々な事柄も記されており、当時の暮らしぶりなども知ることができます。</p>
<p>『火の見櫓の上の海 ー東京から房総へー』 川本三郎 著 NTT出版 1995 (気球の本)</p> <p>房総の海辺の町は、町全体が坂になっていて、坂の上から海をみると、火の見櫓（ひのみやぐら）の上、はるか遠くまで海が見えます。ふらりと房総を旅する著者は、ところどころで途中下車し海を眺めます。利根川へ降りれば、安岡章太郎と風景を共有し、銚子電鉄に乗れば、漫画家上村一夫を隣に感じて座ります。著名人が多く訪れた「近所田舎」房総を満喫できる一冊です。</p>
<p>『太巻き祭りずし新作フルレシピ集 ー楽しいきれいおいしいー』 龍崎英子 著 杉崎幸子 著 東京書店 2005</p> <p>房総半島一帯を中心に伝えられた伝統料理「太巻き祭りずし」。16作品の作り方を掲載した、祭りずしのレシピ集です。</p>
<p>『房総のうた』 朝日新聞千葉支局 著 未来社 1983</p> <p>千葉県にゆかりのある民謡や童謡、歌謡曲など様々な歌が、現地の取材を元に紹介されています。</p>
<p>『房総のふるさと言葉』 安藤操 編 国書刊行会 2005</p> <p>房総の挨拶言葉、好きな房総ことば、漁村言葉など、千葉県の方言を生活者の視点から解説しています。付録CDで実際の会話を聞くこともできます。</p>
<p>『房総の祭り』 中嶋清一 著 うらべ書房 1988</p> <p>調査見聞に基づき、県内200近い社寺の祭について紹介しています。</p>

『房総の民家歳時記 ーなつかしい昔の暮らしー』 道塚元嘉 著

崙書房出版 1996

23棟の民家を取り上げて、写真と紹介文、詳細な平面図のスケッチで紹介しています。伝統的な房総の家屋、素朴で力強いその姿が伝わってきて、訪れてみたいと感じさせてくれる一冊です。

歴史

『図説千葉県の歴史』 三浦茂一 責任編集 河出書房新社 1989

(図説日本の歴史)

図説日本の歴史シリーズの千葉県版。時代別、テーマ別に大変読みやすく編集されており、興味を持った時代、テーマから読みたいものがあるところから読んだり、調べ物をしたりするのも便利です。千葉県の新たな文化創造に向けて、多様な可能性を秘めた千葉県の今後のあり方を考える上からも、ふるさと千葉県を知る一冊です。中学生から読めます。

『図説房総の城郭』 千葉城郭研究会 編 国書刊行会 2002

千葉県内に残る中近世の城郭の中から主要な80余りの城郭を取り上げ、最新の研究成果から図化し、解説しています。県内の城跡の入門書として最適であるとともに、城を実際に訪れ、城郭を見る際の案内書として役に立ちます。

『千葉県の戦争遺跡をあるく ー戦跡ガイド&マップー』 千葉県歴史教育者協議会 編 国書刊行会 2004

千葉県内の近代における戦争に関する遺跡や、遺物が残る18コースを取り上げた戦跡見学のためのガイドブックです。日本の戦後、60余年が経過した現在、本書を手にして戦争遺跡をたどることも大切ではないでしょうか。本書は、写真・遺構図・遺物図などを豊富に掲載し、学校での調べ学習や市民が見学する際の調査研究にも役立つ一冊です。

『千葉県の百年』 三浦茂一 [ほか] 著 山川出版社 1990 (県民100年史)

近代における千葉県を「首都近接性」の構造から始まると位置づけ、房総の明治維新、房総近代の出発、明治社会の形成、産業と文化の動き、大正から昭和へ、揺れ動く地域社会、十五年戦争と県民、敗戦後の千葉県、高度成長、そして今と、時代を追って千葉県の歩みを俯瞰しています。現在発展めざましい千葉県ですが、ふと私たちが郷土を考える時、この近現代の百年の流れを知ることがいかに大切であるかを教えてくれる一冊です。

『千葉県の不思議事典』 森田保 編 新人物往来社 1992

房州小松寺の七不思議とは何か。房総半島の中で、なぜ上総の位置が下方なのか。江戸時代の乳製品「白牛酪」は一体誰が食べていたのか。これらの疑問に千葉県出身、千葉在住の各分野の専門家が答えています。宗教、歴史、人物、地理、考古、民俗、生物、産業と多岐にわたり、楽しく読みながら千葉に関する幅広い知識が得られます。

『千葉県の民衆の歴史50話』 千葉県歴史教育者協議会 編 桐書房 1992

千葉県の歴史をできるだけ身近なものとするために、地域の歴史を民衆の立場から考えようと書かれた本です。実際に見学可能な史跡・博物館なども取り上げられています。テーマは原始時代から、東京ディズニーランド、三番瀬と幅広く、それぞれの項目に参考文献があります。

『千葉県の歴史』 石井進 編 宇野俊一 編 山川出版社 2000 (県史)

旧版の「千葉県の歴史」(小笠原長和、川村優／著)の30年後の出版物であり、旧版以後の新しい史実や知見を加えた読みやすい通史となっています。また、「千葉県の百年」(三浦茂一他／著)との併読を前提としており、付録に索引、年表、沿革表、祭礼・行事、参考文献が付けられています。

『千葉県の歴史一〇〇話』 川名登 編著 国書刊行会 2006

下総・上総・安房国であった千葉県に生活を続けてきた人々の歴史を振り返り、100の話にまとめた郷土入門書です。四方を海と川で囲まれた温暖な気候にはぐくまれてきた千葉県の歴史を振り返った時、読者に多くの示唆を与えてくれる一冊です。

**『千葉県博覧図 一目でみる千葉県の明治時代― 上・中・下』 国書刊行会 編
国書刊行会 1986**

明治時代に発行された『日本博覧図』の中から千葉県編を復刻再編集したものです。各地の名所旧跡、役所、学校、名家の邸宅といった様々な建物の銅版画集で、非常に緻密に描かれており当時の風俗や産業の様子がよくわかる資料となっています。

**『千葉の道千年物語 一房総の歴史街道を旅する―』 山本光正 監修
千葉日报社 2002**

房総の歴史街道や道路にまつわる物語を集大成したものです。「ヤマトタケル伝説」から房総の古街道、琥珀ロード、一般国道の事業推移、東京湾アクアライン開通など、時空を超えた千葉の千年道を旅しています。まだまだ多様な発展を遂げる可能性を秘めた千葉県の「道」を考える案内役となる一冊です。

**『千葉歴史探訪ウォーキング 一県内各地で気軽に楽しめるルートガイド―』
歴史街道歩きの会 著 メイツ出版 2010**

歌舞伎の市川團十郎を支えた成田山、紀州人がもたらした醤油のまち・銚子、万葉のロマン・市川…。千葉県の歴史ロマンあふれる25のウォーキングコースを紹介しています。各地の歴史、見所、魅力、ウォーキング時間や距離など細かく案内されているので わかりやすく、実際のウォーキングにも活躍します。ここに紹介されたポイントを、順を追って歩くと、千葉の歴史が見えてきます。

『房総<千葉>学検定学習帳』 ふるさと文化研究会 編 国書刊行会 2008

平成18年(2006)から始まった「房総(千葉)学検定」の公式テキストの第2集です。検定3年目にあたる2008年から1級検定が行われるのに合わせて、第1集(2006年出版)より掘り下げた内容になっています。房総(千葉)略年表、房総(千葉)学検定例題集(2級・3級)も収載しています。